

西駒演習林の温暖化実験が土壌性ササラダニ類に与える影響について Effects of Open-top Chamber on Soil Oribatid Mites (Acari:Oribatida) at Nishikoma

○福山研二・中村寛志・小林元(信州大学・アルプス圏フィールド科学教育研究センター), 田中健太(筑波大・菅平高原実験センター)

目的

地球温暖化が進行した場合、高山の樹木限界付近において特に大きな影響が出る事が考えられる。そこで、中央アルプスの西駒の樹木限界付近、標高 2650m 付近において、オープントップチャンバーによる、温暖化実験を行っている。中型土壌動物のササラダニ類は、どのような土壌環境にも生息し、その種類数、個体数が多いこと、環境により分布域が異なることなどから、環境指標生物として注目されている。今回は、温暖化実験を実施したオープントップチャンバー内の土壌中と対照区でのササラダニ類相を比較し、温暖化実験の影響を評価することとした。一方、この地域のササラダニ類の垂直分布を調査し、温暖化実験の影響と比較した。また、実際に温暖化がササラダニ類の死亡率にどのような影響を与えるかの室内実験も行った。

方法

垂直分布は、信州大学農学部附属西駒演習林の登山道に沿って、1250m、1700m、1900m、2100m の地点で、広葉樹林と針葉樹林に調査プロットを設置した。2012 年 7 月 26 日に各調査プロットから、100cc の土壌採取缶で、5 サンプルずつ採取し、その日のうちにツルグレン装置にて抽出を行った。温暖化の試験地は、信州大学農学部附属西駒演習林の 2650m 付近の樹木限界付近に設置した。通年加温区と夏期加温区、対照区のそれぞれ 3 箇所ずつから 2012 年 9 月 19 日に土壌サンプルを約 200cc を 2 つずつ採取し、その日のうちにツルグレン装置にて抽出を行った。

2013 年 7 月 17 日に、西駒演習林 2100m 地点と 1250m 地点から土壌を採取し、攪拌後に 400cc ずつ不織布に包んで、パーミュキュライトを入れた 11cm 径の植木鉢に設置し、10℃、20℃、30℃ で 1 ヶ月間の飼育を行った。5 回繰り返しとした。1 カ月後の土壌をツルグレン装置に設置し動物の抽出を行った。

結果

垂直分布では、*Cyrtozetes* 属の一種とクワガタダニ (*Tectocepheus velatus*) などが、標高が高くなるほど増加し、特に *Cyrtozetes* は 1900m 以上でしか出現しなかった。一方、標高に関係なく、広葉樹に特異的に出現する種もあり、ツノバネダニの一種やナガヒワダニの一種のように低標高のみに出現するものもあった。

温暖化実験では、高標高にしか出現しない *Cyrtozetes* は、加温区で減少し、*Chamobates* がやや増加し、*Cyrtozetes* 属が温暖化に敏感に反応する可能性が示唆された。

そこで、室内での飼育実験結果を見ると、2100m から採取したササラダニ類は、ほとんどが温度条件が異なっても生存率はほとんど変わらないことが分かった。1250m から採取したササラダニ類では、温度の違いにより生存率が異なるものが多かった。温暖化に敏感に反応することが予想された *Cyrtozetes* は、30℃ でわずかに減少することが分かったが、それほど大きな違いではなかった。また、同じく高標高に特異的なヤマトイレコダニ (*Phthiracarus japonicus*) は、逆に 20℃ で増加していることが分かった。唯一標高が高いほど増加するクワガタダニのみが、10℃ の飼育で有意に増加しており、分布の傾向と一致した。このことから、短期間の温度の変化による影響と温暖化実験の結果は異なる可能性があること、温暖化実験の影響は必ずしも温度の上昇だけが要因ではない可能性が出てきた。これは、ササラダニの世代が 1 年以上と長いものが多いことも影響している可能性があり、世代交代の時期も含めた実験が必要であることが分かった。